

先週の礼拝メッセージ(2023年5月7日) ベン牧師

「罪を赦された者の愛」 ルカによる福音書 7:36-50

当時のユダヤでは、自分の家に客を招いた時、しかもその客が、当主が「先生」と呼ぶ目上の人である場合、必ずすべきことがありました。一つは客の足を僕に洗わせる、次に客の頭にオリーブ油をそそぐ、そして互いに接吻を交わすというものでした。これは客を招く者の礼儀でした。しかしこの家の主人シモンは、これらを一つもイエス様に対して行いませんでした。彼は、口ではイエス様を「先生(ラビ)」と呼んではいますが、完全にイエス様のことを見下している態度です。

そこに1人の「罪深い女」が入ってきました。聖書でこう表現するのは、性的な罪を犯した女ということです。そういう人は汚れていると言われ、彼女が触れるものは全て汚れてしまいます。ですから、本当ならファリサイ派の家に入れるはずがないのです。しかし彼女がなんの咎めもなくシモンの家に入ってこれたのは、彼が彼女を使って、イエス様を試そうとしたことが伺い知れます。

この女の人はイエス様の足を自分の涙で濡らし始め、その涙を髪の毛で拭き、そして香油を注ぎました。すると、シモンは、「これを見て、『この人がもし預言者なら、自分に触れている女が誰で、どんな素性の者か分かるはずだ。罪深い女なのに』と思った」(39)というのです。

彼女はどこかでイエス様の話を聞き、イエス様を救い主と信じ、罪が赦された経験をしていたのでしょうか。その喜びのゆえに、罪深い女と知れ渡っているにも関わらず、また、追い返されるかもしれないリスクを承知の上で、イエス様のもとに来たのです。そしてイエス様の後ろから、足に涙を流したのです。当時は食卓につく方法は、椅子ではなく、簡易なベッドのようなものに頭を食卓側にして寝そべって食事をしました。ですから足は外側に投げ出した状態であったわけです。女性の目にイエス様の土や埃で汚れた足が飛び込んできました。客として招かれたのに、足を洗ってもらえなかったことを即座に理解しました。そして涙で足を洗い、髪の毛で

拭って綺麗にしたのです。そして足に接吻したとあります。彼女の一連の行為は、自分が罪赦されたことへの喜びの涙と感謝の接吻だったのです。

シモンが女の行為を見て心の中で呟いたのを察して、イエス様は彼に金貸しが2人の人の借金を帳消しにした例えを話されました。(40-43)どちらが金貸しを多く愛する(恩に感じる)かとシモンに尋ねられました。彼は多くの額を帳消しにしてもらったほうだと答えます。

「この人が多くの罪を赦されたことは、私に示した愛の大きさと分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」(47)

女の多くの罪は赦され、その喜びの故の行為であることをイエス様は示されたのです。

彼女は高価な香油をイエス様の足に塗りました。この女の行為は、他の人から見れば無駄に見えたかもしれません。しかしイエス様は、彼女の赦された喜びの行為であることをわかっておられました。主はその動機をご覧になるのです。ファリサイ人シモンは品行方正な人だったでしょう。しかし彼は心の中でイエス様を見下し、イエス様を試すために罪深いと言われる女を利用したのです。シモンの心の中は自分こそ正しい(自己義認)という思いで満ちていました。

一方、この女の人には自分は罪人であるという自覚と、その罪をイエス様は赦してくださったという感謝、喜びがあふれていたのです。そしてその喜びが、イエス様の元へ走らせ、涙で足を洗い、足に接吻してやめず、高価な香油をイエス様の足に塗るという愛の行為となったのです。私たちはどうでしょう。先週のダビデもそうでしたが、罪が赦されたことに対して、喜び踊っているのでしょうか。イエス様のもとに出て感謝の涙を流すことがあるのでしょうか。それほどに罪が赦されるということは大きなことなのです。神の御子が人となって生まれてくださり、私たちの罪を負って十字架で死んでくださり、私たちは罪赦されて、新しいのちが与えられたのです。私たちもこの喜びをもってイエス様のもとに行く時、それは主への愛の行為となって、私たちの日々の生活に表されていくのです。